

はじめに

「YOKOHAMA EYE'S 2016」をお届けいたします。

昨年度までこの冊子は、各年度における青少年をめぐる課題の考察とともに、よこはまユースの実践を中心に編集してまいりましたが、今年度から装いを変え、市内各所で活躍する青少年団体のアップツーデートな実践を中心にご紹介することになりました。

第1部では、地域で注目を集めている「こども食堂」の取り組みと、教育と地域の中間で期待を集めている「高校内居場所カフェ」の取り組みをご紹介します。

また、第2部では、研究者・実践者に寄稿を受け、「“寄り添い”と“支援”」を巡る考察と、「寄り添い型学習支援・生活支援」についての調査報告をご報告いただきました。

さらに巻末には、青少年の直の声として「居場所についてのアンケート結果」を掲載いたしました。青少年を理解するための一助にいただければ幸いです。

これからもよこはまユースは、青少年ならびに市内青少年団体のサポート役として、幅広く市民の皆さまならびに支援者の皆さまへ、様々な取り組みをご紹介しますまいりたいと思います。

引き続き横浜市の青少年育成活動にご理解・応援をいただくとともに、この冊子についての忌憚ないご意見ならびに、編集についてのご要望についてもぜひお聞かせいただければ幸いです。

平成29年3月末日

公益財団法人よこはまユース

代表理事 大向 哲夫

— CONTENTS 目次 —

はじめに.....	2
-----------	---

特集1 地域の居場所としての「こども食堂」

ネットワークから見る「こども食堂」の現在と未来.....	4
------------------------------	---

活動レポート 親もこどももリラックスできる居場所ーサンタこども食堂ー ...	8
---	---

特集2 広がる！高校内居場所カフェのいま

高校生たちの自立を支援する～「高校内居場所カフェ」の運営から見た

高校生たちの課題～(よこはまユース・シンポジウム 報告).....	10
-----------------------------------	----

高校内居場所カフェ活動紹介.....	14
--------------------	----

地域の青少年育成活動を知る・深める

寄り添いながら“支援”するとは？ーことぶき青少年広場の取り組みー.....	15
---------------------------------------	----

横浜市寄り添い型学習支援・生活支援事業を考える.....	19
------------------------------	----

データで見る青少年

平成28年度青少年の「居場所」に関するアンケート調査レポート！.....	23
--------------------------------------	----

青少年に聞いてみました！

「居場所」ってある？ない？あなたにとってどんな場所？

"EYES"は、

Every Youth, Extensive Support(すべての青少年に幅広い支援を！)を略し、
青少年を見守り、育てる複数の目、育つ芽、そして愛をイメージしています。

本誌の編集・発行を通じて、地域の青少年育成活動を“掘り起こす”“情報を蓄積する”“情報を発信する”
“活動をつなげていく”という機能を充実させ、「青少年を温かく見守り、応援しよう」という思いを社会に広めていきます。

ネットワークから見る「こども食堂」の現在と未来

子どもの未来サポートオフィス代表、横浜こども食堂ネットワーク準備会
米田佐知子

こども食堂とは

「こども食堂」という言葉を、どこかでお聞きになったことはありますか？

こども食堂とは「子どもが1人でも来られる場所で、地域の人が無料や低額で食事を提供している」活動です。2012年に大田区にある有機野菜の八百屋「だんだん」近藤博子さんが名付け親で、親しみやすいネーミングと取組みやすさから各地へ広まり、2016年6月の朝日新聞では全国319箇所と報道されました。その後も、どんどん広がっています。

こども食堂を始めようと発意した個人が、ボランティアを募って運営団体を立ちあげたり、事業者が始めるケースなど、それまで子ども支援の活動に関わりのなかった人達が始めているのが特徴です。月1～数回開催が多く、チラシなどで広報し、規模は数名から100名超えと様々。参加費は、子どもが無料～100円程度、大人は300円～1200円で集まった人と食事ができます。場所は、公共施設や町内会館、お寺・教会、飲食店、高齢者のデイサービス施設、個人宅の開放など多様です。

全国の食堂実践者をつなぐネットワーク「こども食堂ネットワーク」には、2017年3月現在で220の活動が参加しているそうです。2016年以降は、全国各地に地域ネットワークをつくる流れが出てきています。

こども食堂以前からある「一緒に食べる活動」

実はこども食堂が広まる前から、子どもや親子が集まって一緒に食べる活動は行われていました。私は以前、子どもや親子の居場所を助成金で支える市民ファンドの事務局長を務め、在職中に神奈川県内約30か所の「居場所」を助成支援していました。フリースペース、親子のひろば、プレイパークなど、NPOが運営する多様な居場所があり、そこには、子どもや親子と「一緒に食べる」活動がありました。一緒に食べることが、子どもの気持ちをほぐし関係を育て、食べながらの“ながら相談”が始まることもあります。丁寧につくられた食事から、子どもが「自分が大切にされている」と感じられるなど、「食」の持つ力は、現場で発見され実践されてきています。

私は市民ファンド退職後、地域の中で飲食を媒介に人のつながりをつむぐ「コミュニティカフェ」の活動に関心を持ち、全国140か所のカフェを訪ね歩いてきました。こども食堂との出会いは、コミュニティカフェとして訪ね手伝った豊島区の「要町あさやけ子ども食堂」でした。

「要町あさやけ子ども食堂」は、現在各地でこども食堂の種まきをされている栗林知絵子さんが、「豊島子どもWAKUWAKUネットワーク」の仲間と始めたこども食堂です。一

人暮らしのシニア男性の暮らす戸建て住宅を月2回開放して開催しています。運営には、NPOスタッフの他、地域住民や大学生がボランティアとして関わっていました。こども食堂以前からプレイパークの活動があり、具体的にサポートしたいこどもの顔が見えていて、子どもが地域のつながりに受け止められていくこども食堂は、地域の子どもの居場所としても機能しており、大きな可能性を感じました。

「横浜こども食堂ネットワーク準備会」について

全国の食堂実践者をつなぐ「こども食堂ネットワーク」が、2016年1月に開催した「第2回こども食堂サミット」(東京豊島区にて開催)には、横浜からも数名が参加していました。こども食堂の立ち上げ実践報告に交ざって、複数の食堂がつながり、食材共有する仕組みをつくった事例報告もありました。



こども食堂の多くは、寄付食材で支えられており、いくつかの活動が集まると支援をマッチングしやすく、大量の寄付食材を食堂間で分かち合うにも、行き来が可能なエリアだと都合がよいのです。横浜にもネットワークが必要と感じました。

何よりも、こども食堂は子どもの育ちに関わるので、子どもの生活圏域での人や組織の連携が重要です。ネットワークは、広域から始め理解を広げ、いずれは小中学校規模で深めていきたいです。社会的影響を生むには、まず基礎自治体単位でつながると有効に思えました。

当時、横浜市内のこども食堂は、あざみ野にあるコミュニティカフェ「スペースナナ」の「ナナ食堂」1か所でしたが、各地で立ちあげ機運が高まり情報が交わされ、関心の高さや盛り上がりは異様なほどでした。こども食堂の発足を待ちネットワークするのではなく、ネットワークづくりで活動の見える化を目指そうと、市内の動きをある程度把握する人で情報集約し、企画会議を開きました。こども食堂や子どもの居場所の実践者、市民活動支援、コミュニティカフェ運営に関わる中間支援マインドを持つ人達です。

同年4月に「ネットワーク準備会」を開催。フェイスブックや口コミで呼びかけ、こども食堂を始めた人・始めたい人・手伝いたい人・応援したい人、約80名が集いました。うち3分の1くらいが食堂実践者でした。意見交換の時間では、場所や人、資金など運営課題に加え、メディアがこども食堂を子どもの貧困とセットで紹介することで、「こども食堂」は貧しい家の子どもが参加する場所というイメージが定着し、必要としている子どもが参加しにくい状況が生まれていることへの困惑も語られました。また、子どもに限定しない

場づくりを目指す食堂もあり、考え方が多様で、「こども食堂」としてリスト化したり、数を把握する難しさが見えました。ネットワークは、つながりやすさを優先し登録制を取らず敢えてゆるくしました。

準備会参加の希望者でメーリングリストを開設、食材寄付などの情報交換のインフラをつくり(現在は、食堂実践者のみ追加登録)、市内各食堂や関連イベント等の情報発信と外部からの連絡受付用に「横浜こども食堂ネットワーク準備会」というフェイスブックページも開設しました。同年10月開催の「食堂実践者交流会」には17団体が集いました。2017年3月現在「ネットワーク準備会」が接点を持つ市内のこども食堂は25です。内閣府「子供の未来応援マッチングネットワーク推進協議会」にも、こども食堂ネットワークを通じて参加しています。

<横浜こども食堂ネットワーク準備会>

●フェイスブックページ：

<https://www.facebook.com/yokohama.kodomoshokudou.network/>

●企画メンバー：

柴田暁子、鈴木智香子、鈴木美美子、須田洋平、関根崇年、木村博之、米田佐知子

こども食堂は、貧困対策か子どもの居場所か

ここからは、私が考えるこども食堂について書いていきます。先に書いたように、こども食堂は、子どもの貧困事例と共に報道されることが多く、学習支援に次ぐ、子どもの貧困に取り組む民間活動とされてきました。こども食堂に関わる個人にも、行政が行うこども食堂支援も、子どもの貧困対策として位置付けられることが多いようですが、月に数回、集って一緒に食事をするだけでは、子どもの貧困問題は解決しません。子どもの貧困には背景に大人の貧困があり、大人の貧困には雇用に関わっています。

多くの子どもの居場所づくり活動が、一緒に食べる取組みで子どもの気持ちをほぐし、子どもがSOSを出せる場や関係をつくりだしていたように、「こども食堂」もいずれ、子どもの困難をキャッチし必要な支援につなぐ場となることが考えられます。その意味では、こども食堂も子どもの貧困対策の一翼を担う面があります。そのため、こども食堂は、福祉や子ども支援などの専門家とつながりを持っていたいです。

同時に、こども食堂の意義として大きいのは、子どもが様々な大人と接点を持てたり、居場所となることです。アフリカのことわざに「一人の子どもを育てるには、村中の大人の知恵と力が必要」というものがあるそうです。子どもの養育者や学校の先生の「タテの関係」、友達同士の「ヨコの関係」の他に、近所のおじちゃん・おばちゃんといった「ナナメの関係」が子どもたちに関係の使い分けを可能にします。困った時に助けてくれる専門家ばかりでなく、まちで出会って、にっこりしてくれる、気にかけて声をかけてくれる、そんな気軽な関係も「居場所」になり得ます。こども食堂では、子どもが普通の顔見知りの大人をつくれるのです。

子どもに関わる場と人がつながっていくこと

こども食堂で「支援・居場所・教育」いずれを重視するかは、運営者によって異なります。一方、子どもが「地域」に期待するものも多様です。学校の友人たちと一緒にワイワイ過ごしたい子どもと、学校では出せない自分を安心してオープンにできる場を求める子ども、日によって使い分けたい場合もあります。地域の居場所は、何が正しくて何が間違いでなく、身近な地域にいくつもあることが望ましいと、私は考えています。

子どもが集まらない、始めたばかりのこども食堂から、よく聞く悩みです。一方で、地域には、はまっこや学童保育、子どもが多数ロビーに集まる地区センターもあります。学校には、気になる子どもをキャッチしながら多忙で充分ケアできない思いでいる先生がいます。今後、そうした場や人が、こども食堂と連携していくことも考えられるでしょう。「食べる、遊ぶ、学ぶ」は、子どもが生きる力を育む必要な要素です。地域社会の中で子どもが関係と経験を重ねられる場としてのプレイパークや親子のひろば、フリースペース等と、こども食堂が横につながっていくことも目指したいです。

いくつかのこども食堂では、民生委員から地元の子どもの様子や対応について聞く内部研修会を開いたり、中学校区で地域住民にも呼びかけた勉強会を開催する動きも出ています。こども食堂が、子どもを気にかける大人がまず地域でつながる場となり、まちに子どもの理解者を増やし広げて、子どもを見守り育てていく第一歩となることを期待しています。連携が生まれにくかったテーマ型と地縁型の活動にブリッジがかかる契機となる可能性もあるのではないのでしょうか。

共に生きあう場として

子どもの貧困は、経済的なものだけでなく、社会的なつながりや経験の不足(関係性・体験の貧困)も含まれます。子どもの貧困率7.7%という横浜市で、日々の食事にも困る、絶対的貧困と言われる子どもの数は、いないわけではありませんが、多くはありません。貧困状態にある子どもの多くは、当たり前にも他の子どもが得られる機会や経験が得られないという相対的貧困です。友達づきあいをするには、食費を切りつめてでも、携帯やスマホは必需品、洋服も気をつけたいです。困っている子どもにもプライドがあります。貧困状態の子どもは見つかりにくいのです。

経済的には不自由がなくても、充分な関心を寄せられなかったり、親からお金だけ渡されて孤食が続く子どももいます。神奈川県教育委員会が2014年に行った「放課後の子どもの居場所づくりに向けた実態調査」では、放課後に異年齢の多様な人と交じって過ごしている小学生は約1割という結果がでています。地域のつながりが薄くなっている社会で「関係性の貧困」は、子どもたちの大多数が該当する時代になっています。いま、社会の中で孤立してつながりが持てずにいるのは子どもたちばかりではありません。こども食堂で出会った大人と子どもが、月に数回のこども食堂開催日以外にも、個人的に集う機会をつくることで、つながりは日常へ広がります。子どもは支援しようという大人の気配を避けます。「子どもを支援する」のではなく、地域の中で日常的に「共に生きあう関係を生み出す」、子どもを真ん中にしたこども食堂の活動が、各地に広がっていくことを願っています。

親もこどももリラックスできる居場所 —サンタこども食堂—

長年、タイでエイズ孤児支援施設を運営してきた吉田登さん(75歳)が、日本で6人に1人のこどもが食事にも満足にできない貧困状態にあることにショックを受け、2016年5月に港南台地域ケアプラザや地域のボランティアに呼びかけてスタートしたのが「サンタこども食堂」です。

親子で楽しく過ごせる場所

お邪魔した日は、「さくらご飯」「さくら麩のおすまし」「かき揚げ」「サラダ」「さくらせんべい、らくがん」といった季節感のあるメニューが用意されていました。20人ほどの親子が会話を楽しみながら、スタッフの手作りの夕食を食べていました。母親同士で「おいしいね」「かき揚げ、久しぶり!」といったはなやいだ会話も聞かれ、食事が終わってからは紙芝居を見たり、おもちゃで遊んだり、こどもたちにとっても親にとっても楽しく過ごせる場所になるよう、運営されていました。



昨年5月にスタート



吉田さんは(左写真中央)スタートにあたって、会場となる港南台地域ケアプラザや港南台連合自治会、港南台地区社会福祉協議会にも協力を呼びかけ、自治会の回覧板やタウン紙などで「こども食堂」のPRを行いました。これまで兄弟や友達同士、親子など200人ほどの利用があり、毎月1回の食堂を楽しみにしている親子やこどもも増えているとのことでした。

高校生ボランティアも参加

「サンタこども食堂」は毎月第1金曜日17時～19時に開催されています。運営は吉田さんをはじめとして6人の運営委員を中心に20人ほどのボランティアが毎回受付や調理などを担っています。食材は「神奈川ゆめコープ」や地域の方からの寄付で賄っています。近くにある県立横浜明朋(メイホウ)高校のボランティア部の生徒もボランティアとして数名が参加してくれています。この活動を始めるにあたり、地元の4つの



学校を訪問した結果、同校から申し出をいただいたもので、こどもたちの年齢に近いせいもあってこどもたちの人気の的になっているそうです。

単に食事を提供するだけでなく、こどもが遊べるスペースの確保や、ボランティアによる紙芝居などこどもたちにとって楽しいスペースを提供しています。

「精神的な満腹感」も提供



吉田さんや他のスタッフから、サンタこども食堂の今後についてお話を伺いました。

「来たこどもたちはこのような場所が身近にないのかと思うほど、結構はしゃいでいます。それだけこの場所に慣れ親しんできたのではないのでしょうか。親同士のコミュニケーションの場にもなっていて、『肉体的な満腹感』だけでなく、『精神的な満腹感』も提供できているように思います。」

「たった月1回のこども食堂では、支援につながらないことは十分承知していますが、食事を作るスタッフがもう少しいないと、回数を増やすことはできません。でも今月からは毎月第3火曜日に、新たなボランティアが加わって港南台地区センターで新たな食堂を開設します。ここでは幼児から中学生までは食事代を無料にします。食事の提供だけでなく、こどもの要望に沿った運営を目指したいと思っています。自治会や民生委員にも相談して、勉強や宿題の面倒を見ることができるようになります。これまでは、幼児や小学校低学年が多かったのですが、中学生も大勢来てくれるのではないかと期待しています。」

親子ともどもリラックスできる居場所として

吉田さんからは「近くに住む、あるシングルマザーのこどもがここに通うようになって1年。こどもがとても明るくなりました。また、お母さんもそれまでの暗い表情からとてもステキな表情を見せるようになりました」といったエピソードを紹介していただきました。

こども食堂は月1回の開催ですが、こどもの養育や仕事に忙しい母親にとっては、地域のさまざまな人々との出会いの場、ひいては孤立せずに地域の人とつながる貴重な場になっています。食事をとりながら、母親同士が楽しそうに会話している様子を見、また吉田さんや他のスタッフが各テーブルをまわって、母親や子どもたちに声をかけをしたり、話を聞いている姿を見ても、この食堂が単に食事を提供するだけの場所ではなく、親やこどもたちに寄り添う場になっていることがわかりました。吉田さんからは「ここはお母さん自身が解放され、親もこどももリラックスできる居場所です」といった説明がありましたが、親やこどもたちにとっては、安心できる場所、人とつながれる場所として身近で貴重な居場所になっているのではないのでしょうか。



(取材・文 平野嘉昭)

平成28年度 よこはまユース・シンポジウム 報告

高校生たちの自立を支援する

～「高校内居場所カフェ」の運営から見た高校生たちの課題～

「よこはまユース・シンポジウム」の今年のテーマは、「高校内居場所カフェ」でした。まずは、「高校内居場所カフェ」の県内での先駆者である、NPO法人パノラマの石井正宏さんと社会福祉法人青丘社の鈴木健さんのお二人に、実践報告を頂きました。その後のパネルディスカッションでは、高校生たちが今、何を悩み、何を課題としているのか？を明らかにするとともに、高校生の自立に向けた大人や社会の関わり方について考えました。

第1部 実践報告

アウトリーチ支援としての校内居場所カフェ

●報告者：石井 正宏さん【NPO法人パノラマ 理事長】
（神奈川県立田奈高等学校・ぴっかりカフェ）

せめて文化資本の提供を

「ぴっかりカフェ」は週一回の開催で、200人くらいの生徒がやって来ます。コンセプトは「カルチュラルシャワー」。文化的なものをシャワーのように提供していくことです。

フランスの社会学者ピエール・ブルデューによると、経済的資本、文化資本、社会関係資本、この三つの資本を持っていると社会的に優位な立場になれると言われています。逆に、この三つを持っていないと、圧倒的に社会的不利な状況に陥ってしまう。良い経験や良い体験をたくさんしている人は、たくさん文化的資本を持っている。その文化的資本を通して人と繋がり、文化的資本を社会関係資本につなぎ、仕事に結びつけることもできます。僕が考える支援は、お金の支援はできないが、何とか文化資本を提供することができないかということです。



ひきこもりの若者の受け皿よりも穴を塞ぐ支援を

僕は、ひきこもりの若者達を支援しています。雨漏りのする家をイメージしてみてください。天井からひきこもりの若者が雨粒となって落ちてくる。その下にバケツを置いていく。サポートステーションを160箇所から200箇所に増やし、年齢も42歳までなどバケツを深く大きくしていく。そこに税金が投入されている。僕としては、受け皿のコストを増やすのではなく、むしろ天井に登って、穴を塞ぐ支援をしていきたいと思っています。

川のイメージで言うと、上流から所属を失った若者が流れてきて、地域若者サポートステーションやユースプラザといった「中洲」にたどり着きます。主な利用者は27歳から30歳。ここにたどり着けるのは、ごくごく一部です。高校進路未決定や中退した子ども達がここにたどり着くまでに、10年の歳月がかかります。その頃には複合的な困難を背負い込んでいます。多くの若者は、そのまま海に流れ出て、中高年のフリーターになったり、自殺、一家心中してしまったり、反社会的な行動を起こしてしまうこともあります。自分の役割は、どちらかの岸にたどり着けるようにしていくこと。発達障がいを受容から障害者手帳を取ってもらって、就労移行に導く支援や福祉側にいく支援も担当しています。リーマンショック以降、学校の中は教育という専門性だけでは立ち行かなくなっています。

僕たちのような外部支援者が学校の中に入っていく、先生達では発見できない課題を発見しています。

生徒を所属につなげていくのが「校内居場所カフェ」の役割

トラブルを起こす、学校に来てテストを受けているが発達障がいがある、家でDVを受けている、ネグレクトを受けているなど課題集中校は特別指導が多いのが現状です。そういった子を見つけ、支援し、学校という所属を失わず企業へ、あるいは福祉という所属へつなげていく。「貧困対策大綱」には、「学校をプラットフォームに」とありますが、そのプラットフォームが「校内居場所カフェ」かなと思っています。

特定の子達に支援をするのはスティグマが生じます。スティグマとは“恥辱”のことです。子ども達は自分だけが支援を受ける、秘密を持たされるのを防ぎます。相談室に入っていくのを見られたら、LINEで拡散されるかもしれない。スティグマが生まれない状況で彼らと出会いたいと思い、私は「図書館で相談員がしたい」と申し出ました。「貧困の子、生活保護の子だけがこのおにぎりを食べていいよ」では誰も手を出しません。

地域と連携した高校内居場所カフェの運営

●報告者：鈴木 健さん 【社会福祉法人青丘社】
（川崎市立川崎高校定時制・ぼちっとカフェ）

ぼちっとカフェの始まり

「ぼちっとカフェ」が始まったのは、今から2年半前くらいです。市立川崎高校は全日制と定時制があります。中学校が附属になり、校舎も建て替え、その中のフリースペースに「ぼちっとカフェ」ができました。定時制に来る高校生の2割は地域の子どもの遊び場になっている施設「ふれあい館」で付き合いがあったこどもです。自由にやってほしいと学校から言われているので、校内を歩き回り、教室に入り、カフェに来るよう声をかけています。飲み物やお菓子を出して、スタッフはひたすら話を聞き、色々な雑談をします。生徒とはふれあい館でも出会うし、地域でも出会います。



カフェに来る生徒は人間関係が不安定

カフェの中で、アンケート調査をしてみると、不登校経験のある生徒が多く、71人の回答のうち、半分以上が不登校経験者でした。かなり長期で不登校だった生徒もあり、定時制の中間部は、働きながら定時制に通うのではなく、ほとんどが不登校経験者であり、人間関係などでつまづき、心機一転で高校に入って来た子たちであることが分かりました。

生徒は人間関係が不安定です。SNSでの喧嘩の理由が、消しゴムが使われた、など些細な理由から学校に行けなくなったりしていて、小学校低学年レベルと驚くこともあります。子供達は家が大変で、兄弟が多く、アルバイトのお金を家に入れ、家事全部をして、中には虐待を受けている子もいる。しんどい、家に帰りたくない、帰れない、帰らない子がいます。

日常生活に不安がある生徒たち

カフェに来て上手くいった子もいれば、上手くいかなかった子もいます。上手くいったと答えた子が、本当にそうなのかは分かりません。家族のこと、経済的なこと、友達との人間関係のこと、将来のことなど日常生活に不安があると答えた子は、今年の方が増えて

います。家族のことがあって経済的に大変で、将来のことが不安だという生徒が多く、自分自身の体が病気だ、精神的に不安定なんだとアンケートに堂々と書いてきます。不安を訴える人数が去年2人しかいなかったのが、今年は17人になりました。

経済的な理由から退学しなければならないかもしれない、親からの虐待、自分が罪な存在だから相談しちゃいけない、相談したら人に迷惑をかけるから、と涙ながらに相談してくれたこともあります。不安を訴える子が増えたというよりも、不安を言葉にして伝えることができるようになってきたのかなと思っています。

第2部 パネルディスカッション

高校生たちの課題に、社会やおとなはどう関われるのか

●コーディネーター：米田 佐知子(子どもの未来サポートオフィス代表)

●パネリスト：石井 正宏さん、鈴木 健さん

学校との連携のあり方

コーディネーター(米田)

個人ではなくチーム対応、学校以外の人に関わりをデザインすること、関わりのパス(連携)を回すことが大切とわかりました。カフェの中だけで収まらないパスの回し方について、難しさも含めてお話しいただけないでしょうか？

石井

学校には週一回しか行ってないので、学校の中のパス回しの司令塔にはなれません。でも先生が全てというわけでもない。学校の中でぴっかりカフェの話をする場に、25人の先生が来てくれた。先生たちは責任感が強い。ギリギリまで引っ張って、もうダメだとなった時に、パスを回して来る。先生たちがもう少し早くパスを回してくれたら、なんとかなるケースもある。でも早すぎれば、丸投げになってしまう。先生とのコミュニケーションが重要になります。

地域の力をどう活かすか

コーディネーター(米田)

チームでやっていく上で、地域の力は役立つのでしょうか。

鈴木

もちろん、やり方次第ですが、地域や家族の力は大きいと思います。カフェの中で色々な声を発することが出来るようになって良かったと思いますが、限界はあります。カフェだけでは解決しきれない。生活などをどうサポートしていくかが課題です。

石井

どこにもはまらず困った生徒は、学校の「溜め」で受け止めて行く。田んぼが干からびている時、ため池に水を与える。ため池が干からびていたら田んぼは潤せない。相対的貧困の子達はなにかあると枯れてしまう。そういう時に、水を与えられる地域の大人達と繋がっていることが大切で、大人が学校に入っていくことの意味がここにあると考えています。

卒業後の支援

コーディネーター(米田)

カフェで支援し、卒業までたどり着いた後どうするか。キャリア支援など、応援の仕方についてお話いただけますか。

石井

例えば施設出身者の生徒が就職した後に仕事をやめてしまい、相談に来てくれたことがあります。担任が居なくなってしまうと、母校とはいえませんが、ぴっかりカフェがあって石井さんがいるとなれば、また相談に来てくれます。主治医が合わない、と相談に来た子を障害者手帳取得に導き、障害者年金の申請をさせました。顔が見えなきゃ意味がない。アウトリーチャーの使命でしょうか。

活動を地域に帰す

コーディネーター(米田)

最後に、これからこの事業を発展させていくために、どんなものを求めていきたいか。こんなものが必要となる、などお話をさせていただけないでしょうか。

石井

今までの話とはひっくり返ってしまいましたが、ボランティアの方々が良い動きをしてきて、自分はいらんんじゃないか、この活動を地域に返す必要があるのではないかと考えています。高校生たちの可愛がられる力はすごくて、笑顔さえもらえれば何でもする方々がたくさんいる。地域ボランティアで支援し、僕たちが抜けていく考えは捨てずに取っておきたいと思っています。

鈴木

EU諸国でも大きな政策課題は移民問題、若者の就労問題です。日本も同じような課題が増えて来ました。介護保険を中心とした、地域包括フェアという言葉が広がっています。子どもから高齢者まで全てを含めた地域包括の川崎モデルを作っていこうとしています。学校をプラットフォーム化する取り組みとセットにして、どんなデザインをしていけるか、考えながら政策部署の方と一緒に汗を、時には涙を流しながら模索しています。そうは言っても僕は頭より心で動くタイプなので、生きるしんどさの連鎖がどうにかならないか、と考える時、「眼差しの地獄」という社会から見られる眼差しのしんどさが問題だと感じています。最終的には社会の眼差しが変わっていかないと救われない。眼差しを変えするには何が出来るのか日々悶々としているところです。

まとめ(米田)

お二人の話を聞いていると、最後は地域や社会の中で、子どもが生きていくことをイメージされていることがわかります。学校の中での出会いから信頼貯金が貯まってチャレンジしてもいいかなと、子どもが思えることも大切だと感じました。先生は数年で異動になりますが、カフェはあり続ける。また先生が異動した赴任校でも新たな種がまかれたら良いと思います。「子どもの抱える困難は子どもの自己責任ではない」、「もっと色々な生き方がある」と伝え合うことで生きやすい社会を子ども中心に作っていく。その一つにカフェがあり、ここで出会った人達が、校内カフェという存在を多くの人に伝えていっていただきたいと思っています。

貴重なお話をしてくださいました石井さん、鈴木さんのお二人、ありがとうございました。(紙面の関係から、シンポジウムの一部を要約、抜粋しました)



高校内居場所カフェ 活動紹介

高校内居場所カフェとは、図書館や空き教室、フリースペースなど学校内の空きスペースを利用して、無料でお菓子や飲み物を提供するカフェ形式の交流相談の場づくりを行う取り組みで、近年、大阪や神奈川を中心に各地の高校に広がっています。

新しい高校内居場所カフェが生まれました！

ぴっかりカフェ



- 実施校：神奈川県立田奈高校
- オープン日：毎週木曜日
- 時間：昼休み・放課後
- 場所：学校図書館
- 運営団体：NPO法人パノラマ

横浜市や川崎市の主な高校内居場所カフェ

- 実施校：川崎市立川崎高校定時制
- 実施日：毎週金曜日
- 時間：17時～22時
- 場所：職員室前オープンエリア
- 運営団体：社会福祉法人青丘社



ぽちっとカフェ

横浜総合高校で「ようこそカフェ」がオープン！



- 実施校：横浜市立横浜総合高校
- 実施日：毎週水曜日
- 時間：12時～17時30分
- 場所：フリースペース
- 運営団体：公益財団法人よこはまユース
NPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ
NPO法人横浜メンタルサービスネットワーク

平成28年10月、横浜市立横浜総合高校(3部制・定時制・単位制)に、新しい高校内居場所カフェとして「ようこそカフェ」が誕生しました。

ようこそカフェは、県立田奈高校の「ぴっかりカフェ」や市立川崎高校の「ぽちっとカフェ」をモデルに、週1回、高校内のフリースペースで、無料で飲み物やお菓子を提供するカフェ形式の交流相談の場づくりを行っており、毎回200人を超える生徒でにぎわっています。

カフェでは、大学生や社会人のボランティアや若者支援団体のスタッフが「店員」となって、お菓子や飲み物を片手にしながらの何気ないおしゃべりや、普段はなかなか出会うことがない「大人」との出会いや交流の中から、高校生が日頃感じている悩みや不安、課題をキャッチし、相談にのったり、解決に向けて一緒に考えたりしています。

誰でも利用できるオープンな場所での交流相談を通して、中退や進路未定での卒業など自立に向けたリスクを抱える高校生への支援の場が広がっています。

地域の青少年育成活動を知る・深める

寄り添いながら“支援”するとは？ —ことぶき青少年広場の取り組み—

ことぶき青少年広場
石井淳一

ある夕方、「ことぶき青少年広場」に、20代の女の子が、バイト先のコンビニであった最近の出来事を話そうとやってくる。

彼女、中学生の頃は、いったんキレるとタチュウ(他の中学校)のヤンキー男子にさえ殴りかかっていくような武闘派だったのだが(笑)。すっかりオトナになった今では、なんだかとても職場で頼りにされているらしく、本人は気ままなバイト暮らしがしたいのに、やれ資格を取れとか正社員になれとか言われているらしい。今回はとうとう「マネージャー」になったということで、そのことを喋りにきたのだ。

そうこうしているうちに、別の一角では、仕事帰りの男の子たちが、港の倉庫の荷出しの仕事でバナナをどれだけ運んだとか、かばちゃを移動してどれだけきつかったとかの話始める。

乳幼児を抱える母親たち(20代から30代前半、時に10代)は、子育て談義で盛り上がっていたりする。

そんなお喋りができるところが「ことぶき青少年広場」であり、そんな話を聴くことが私たちスタッフの仕事である。他愛もない馬鹿話が延々と繰り広げられ、皆でケタケタ笑いあっていることも多いのだが、時にシリアスな話にもなる。

ある日、10代半ばの少女が瞳を潤ませながら、時に叫ぶようにして問いかけていた。
「ねえ、どうしたらいい？ あたし、もう行く場所がないの。帰るところがないの。どこか一晩過ごせる場所はない？」
僕は、そんな彼女に対して、なにも答えることができなかった、応えることができなかったのだが。

ことぶき青少年広場

ことぶき青少年広場は、ドヤ街(簡易宿泊所街)寿地区にある、青少年のための居場所であり、支援施設である。2009年に、横浜市の「青少年の地域活動拠点事業」としてスタート。2014年からは「寄り添い型学習等支援事業(現「生活支援事業」)」を受託し、「中学生以上の誰でもが来られる居場所」から「登録児童を対象にした支援」への切り替えを迫られたのだが、「居場所」こそ大事であるという強い思いから、自主事業として居場所機能も維持したまま場を開いている。



子どもたちの求めるもの

「広場」で「帰るところがない」と訴えていた日から数ヶ月後。その彼女が「淳ちゃん(筆者は名前からこのように呼ばれることが多い)にはホント助けられてる。あたしんちパパいないから父親代わりみたいな感じ」などと言う。

もちろん、子ども若者から頼りにされていることを自慢しよう、などというのではない。

そして何より、「帰る場所がない」と泣いていた時に、「具体的になにも役に立てなかったこと」がずっと気になっていた僕としては、正直かなり意外な言葉でもあった。

なので「でも、俺じゃなくて、いろいろと実際に相談を進めてくれたり、助けてくれたりした人もいたわけじゃん？」などと尋ねてみる。

「うん。確かにそれはすごい感謝してる。でも、例えば小学生の頃とかは、食事もらったりして、そういうことですごく助かったけど、中学になったりするとやっぱ淳ちゃん

にいろんな話聞いてもらったりとかも大事になって来たと思うよ」

もちろん、子どもによってそれぞれで、彼女の場合は特にこの辺りの思考が大人びていることがあってのことなのだけれど、中学生ぐらいでも単純に「物をくれる人、食べ物をくれる人(大人)が好き、大事」という子も多いと思う。

だ、けれど、「物をくれたり、何かをしてくれたりするだけでなく、話を聞いてもらうこともすごく大事」と、そのように思う子もいるわけだ。それも、彼女のように、「困難を抱えて行き場のない子どもたち」の中に。

ある若い母子と

もちろん、「何かしてあげる」ことも少なくない、日々の活動ではある。

例えば、保育園の年長さん以下3児の母、彼女自身の母親の代から付き合いのある20代の女性は、真ん中の子が発達障害と診断されていて、ともかくやたらと動き回り、自分の思い通りにならない出来事があって一旦暴走し始める

と本当に手がつけられなくなる。そして、子どもたちが体調を崩して三人ともダウン、などということになると、時にSOSがきて、夜間救急外来に行く時間帯、雨がひどい場合等、可能な場合僕が車で病院まで運ぶ。

先日はその真ん中の子が待合室でおとなしく待っていらなかったため、看護師さんに注意され結局診察を受けずに帰ってきてしまったという。LINEや電話で、そういった経緯や愚痴などを聴くが、幸い、寿地区の場合、僕だけではなく、例えば彼女の場合は子どもと同年代のいとこたちが10人近くいるというような大家族で、その母親たちも話の聴き役になってくれる。そして、こういう「話の聴き役がいる」ということ自体が、とても大切な「子育て支援」になる。

さて、そんな周囲の支えも力になったのだろう、なんと翌日、病院に電話して息子の状態等を話し、きちんと理解を得て、子どもたちにあった対応を約束してもらったという報告がくる。彼女のこの行動力、コミュニケーション力は、率直にすごいと思う。

と同時に、もし、例えば代わりに僕が病院と話をしてしまっていたなら、彼女のこの自分自身で病院と話をつけるというような行動はスпойルされていたかもしれないとも思う。

なるべく話を聴く。自分自身ではどうにもならないことは、時々助ける。でも、基本的には自分の力で生きいってもらう。そんな、彼女との関係性、関わりのある方というのは、「寄り添いながら支援する」ということの一つの形として意味があると思っている。

「寄り添い型」支援

今「寄り添いながら支援する」と書いたが、これは「寄り添い型支援」というネーミングから喚起された言葉だ。これは近年全国各地で行われている「困難を抱える子どもたちへの支援」の横浜市版の事業名であり「寄り添い型」というネーミングは横浜市独自のものと言う。

しかし、ただ支援をしている、と言うだけで、はたして「寄り添い型」という名にふさわしいものになるのか。そもそも「寄り添いながら支援する」とはどういうことなのか。

一番必要な層に届かない「支援」

先に、ことぶき青少年広場では地域活動拠点事業の補助金を打ち切られ、寄り添い型支援を受託しながらも、居場所事業を続けていると書いた。

そのことについて語る際、まず、僕らが寿地区に関わる子ども若者の多くが、学校や、教師、親に代表される「大人」に対して、心理的な距離がある場合が多いことを書いておかなければならない。いわゆる「ヤンキー」的な表現をする子達だったり、外見や行動の表現としてヤンキーとは言えなくても、話を聞いてみると大人への不信感嫌悪感のかたまりだったり。

この層は、大人社会との「すり合わせ」の苦手な層であるから、実社会に出ても生きづらさを感じる事が多くなる可能性の大きな層である。しかし、前述大人全般に対して不信感を持ち、距離のある彼らが、大人が「支援してあげる」と看板を掲げているような窓口に出向くだろうか。そして、心を割って自分の抱える困難さについて語るだろうか。はっきり言って期待薄だろう。

「誰でもが来て良い居場所」の力

今まで大人って

いろいろ嫌なこととかやってくるし

あまり良い印象なかったけど

学童や青少年広場に来るようになって結構変わったよ

「大人もおもしろいんだな」

と思うようになったよ

これは、ある外国系シングルマザー(被生保世帯)の子どもが語った言葉だ。

彼女の場合、いわゆる大人に対する反抗を表現するようなヤンキー的な要素はなく、いたって温和で真面目で人付き合いにも積極的で明るい少女である。

しかしその彼女にして、デフォルトで「大人って嫌なことやってくる良い印象のない存在」なのである。

そして、後半部分。「寿に集まる子どもたちの居場所」に来るようになって、そんな大人の印象が(良い方向に)変わった、と言うのだ。

「居場所」と「支援」

居場所」と「支援」ということばを使ってきた。あくまでもこの文章内での使い方だが、前者は(対象とする年齢ならば)誰もが来て良く、特にその中で何かを克服することを志向されない場所として。後者は、例えば引きこもりやニート、不登校や経済的貧困などの、カテゴライズされた困難さを抱える青少年を対象とし、その困難さの解消・克服を目指すものとしてである。

僕自身は、そもそも「居場所」というのは無目的であって良いと思っているのだが、まずここでは「支援(という目的のため)にも居場所は有用であり必要である」という観点から少し書いてみる。

「支援」に対する居場所の有効性として、まず、「誰でもが」来られることがある。ということは、「困難さ」が顕在化している子も、そうでない子も来られる、来ているということだ。

実は、「支援」を考える時に、困難さが目に見えるような形になってから関係性を作るのでは遅いことも多いのだ。

また、困難さは、なかなか見えない。表現できない困難さの方が深刻であるとも言える。

居場所、では、困難さが顕在化する前から関係性作ることができる。小さな困難さ(の段階)でも支援する側に伝えてくれる関係性を作ることができる。

また、「支援」の問題点として、いくらその困難さに対する解決策を大人の側が示したとしても、そもそもその解決策を実行するだけのエネルギーが若者の側になくなってしまっていることが多い、ということも挙げられる。

支援の対象となるような困難さの多くは「生きづらさ」と呼べるようなものであり、その中で子どもたちは当然のように疲弊している。いくら「こうしてごらん」「こうしたほうがいいよ」という提案を受けても、それを実行するだけのエネルギーが残っていなければ、どんな素晴らしい解決策であったとしても絵に描いた餅でしかない。

居場所では、そこで緊張感に迫られることなく思い思いに過ごして休息をとったり、そのプログラムに参加して楽しい思いを味わったりすることにより、自身が困難さと付き合うためのエネルギーを補充することができる。

そもそも「困難さ」を「克服」することが絶対的な「解」なのだろうか？

周囲から見ての困難さも、本人はたいして生きづらさを感じていない場合があるし、またその「生きづらさ」が本人の生に対して根源的なものというよりも、単なる社会とのすり合わせがうまく言っていないだけの場合もあり、その際にはそのすり合わせについてうまくサポートしてやれば、たいした問題も残らなかったりする。

そんな彼らにとっては、「困難さを克服すること」が通奏低音になっている「支援プログラム」は、そこに関わることで自分が新たな「生きづらさ」を生みかねない危険性さえはらんでいる。

そして、「困難さを克服することを掲げず、自分のペースで思い思いに過ごせる居場所」は、そんな危険性からかなり離れたところにあるのである。

寄り添いながら支援する

大人が子ども若者に支援するには、まず居場所での関わりがあった方が良く、そこで何か困難を抱える子どもにも出来ることがあったとしたら「寄り添いながら支援する」と言うことになるだろう。

そしてまた、そもそも寄り添いながら何か支援をしなければいけない、こども若者に何かをしなければいけないと思ひ込むこと自体が、少し滑稽と言えるかもしれない。

とりあえず、「寄り添うだけ」でよいと思う。それが可能ならば、寄り添うこと、それ自体が彼らが生きて行く上での支援になると思うからであり、またそのことを抜きにしては、こども若者が自立した大人に成長して行くための支援などできないだろうと思うからである

「子どもとゆく」から始まる

幸い、寿地区に集まる子ども若者には、僕がやらなくても、真摯にその心情、状況をサポートしてくれる支援がある。それゆえに、僕個人としては寄り添うだけでいい、などと呑気なことを言って居られるということはあると思う。そして、寿に集まる子ども若者には、そもそも自分自身で困難と付き合っていけるだけの力が残っていることも多い。

だから、僕のやっていることは、とても恵まれた環境の中で、という限定されたものだという批判があるかもしれない。(社会的には蔑視されるドヤ街という場所で、「とても恵まれた環境」が形成されているならば、それ自体が一つの大きな意味を持つのだが。)

しかしまた、冒頭から書いて来たように、寄り添うということが、例えそれだけであったとしても、子ども若者にとって力になっていることは事実だと思うし、子ども若者に対する支援を考える時に、忘れてはならない視点であると思う。

寄り添うだけから始めて、何ができるか、何かができるのかは、寄り添いながら考えて行けばいい。「子どもとゆく」から始めればいい。

同じ時間の中にいると言うこと

ちなみに、一応与えられたテーマに沿って書かねばと思ったので、「支援」に引き付けた書き方をしているが、僕自身にとっては、実は後付けの論理でしかなかったりする。

例えば、病院の待合室で、文句も言わずにじっと待つ長女、まだまだ甘えん坊で母親を姉兄に取られるとすぐに機嫌の悪くなる次男、そんな子どもたちのことを時に笑いながら母親と語り合う時間。結局なかなか落ち着かず病室に一緒には入れなかった長男を、なんとかなだめながら近くの公園まで抱きかかえて歩き、ベンチに腰掛けてハグをしながら道ゆく自動車のことを語りかけて(車など動くものが大好き)いる時間。そのあいだは彼も落ち着いて居た、そんな時間。

「そんな時間の流れの中に共に居られること」、そのことも言い換えれば「子どもとゆく」ということだと思うが、そういう感覚が何よりも大事で、優先されるべきことなのだ。

「人間の居場所」は、生きていくための支援の場

今、耐震関係での建て替え中で、取り壊しになってしまった寿市営住宅、その「集会室」で、15年間ほどになるだろうか、「夜の居場所」を開いていた。土曜の夜9時までの「寿若衆宿」のあと、10時半ぐらいまで、名前もつけずに、ただ中学生以上なら誰がきてもいいよ、と言って僕個人が開いていた場。「居場所」。

本当に、無目的で、ただワイワイがやがやダベったり騒いだり、ゴロゴロしたりしているだけの時間だったのだが。

例えば仕事のことで、そのほかの生活上のちょっとしたことで、ストレスを感じ、時にイライラしてしまうことは、普通にあるわけだけれど、そんな状態でこの「名もなき夜の居場所」に来て、居て、喋くりあっているうちに、くよくよ考えていたこと、些細なこだわり、そんなことがどうでもいいことのように軽くなっている。そういうことは、度々あったものだ。

「居場所の存在」というものを身を以て感じることの多い、そんな時間だった。

青少年の居場所、は、人間の居場所であり、その存在そのものが、人が生きていくための支援の場、になっているのだと思う。



横浜市寄り添い型学習支援・生活支援事業を考える

横浜市立大学・子ども若者居場所研究会

高橋寛人

はじめに

2013年に「生活困窮者自立支援法」が制定されてから、生活困窮家庭の子どもに対する学習支援が全国的に展開されるようになりました。横浜市ではそれ以前から困難を抱える子どもたちへの学習支援や生活支援を始めていましたが、「生活困窮者自立支援法」の施行でさらに支援が拡大されました。2015年度は市内18区で各区1箇所、鶴見区と中区は各区2箇所、合計20箇所です。2016年度には「寄り添い型学習支援事業」を13箇所、学習支援だけでなく生活支援も行う「寄り添い型生活支援事業」が7箇所となっています。

横浜市の学習等支援事業関係者の意見

ところで、横浜市立大学子ども若者の居場所研究会では、2012年より、金沢八景キャンパスを主な会場として研究会を開催してきました。実際に子ども・若者支援に携わっている人々が経験を語るもので、研究会というより報告・交流会です。とくにメンバーは決めず事前申し込み制もとらず、facebookで呼びかけると関係者や参加経験のある人々がシェアして広まり、興味を持った方々が集まるという方式で、およそ3か月に1度のペースで続けています。

一昨年頃から、横浜市の寄り添い型学習等支援事業に関わっている団体や、市の事業とは別に独自に学習支援を行っている参加者から、学習・生活支援事業について関係者が話し合う場がほしいという声が多数寄せられるようになりました。

横浜市の寄り添い型学習・生活支援事業は、困難を抱える子どもたちにとって大変意義のあるものです。これをさらによいものにして広めていくために、この事業に携わっている団体の方々に、事業の意義や効果をうかがい、改善のために何が望まれるかを尋ねて、それをまとめて公表することが役に立つのではないかと考えました。

そこで、2015年8月に「寄り添い型学習等支援を考えるシンポジウム」、11月に「子どもたちの貧困に対して今、何が出来るのかを話し合う集い」を開きました。さらに、2016年2月に「寄り添い型学習等支援を考える研究会」を開催しました。この研究会には、横浜市の寄り添い型学習等支援事業に携わっているNPO等の団体に呼びかけて参加を要請しました。また、各団体に事前にアンケートを送り、学習等支援の実施状況・効果・課題等についてたずねました。ひとつの団体が複数の区の事業の委託を受けているケースがあるので、事業団体数は合計12です。研究会には10団体の参加を得ました。

研究会での意見とアンケートの回答を『横浜市寄り添い型学習等支援の検討— 研究会での委託法人関係者の意見とアンケートから —』（横浜市立大学子ども若者の居場所研究会、2016年3月）にまとめました。そして、改めて本年2月にも、この事業の委託を受けている団体で支援に携わっている方々にアンケートを行い、また、大学に集まって意見を述べてもらいました。全体的な傾向は前回とほぼ同様でした。この報告書は現在作成中です。（昨年度作成の『横浜市寄り添い型学習等支援の検討——研究会での委託法人関係者の意見とアンケートから』横浜市立大学、2016年3月。全文13ページで、横浜市立大学のホームページに掲載しています。報告書名のタイトルを検索窓に入れば見られると思います。http://www.yokohama-cu.ac.jp/lc_center/academic/kyouin_chiikikouken/pdf/h27_yorisoi_en.pdf）

そこで、ここでは、昨年の報告書の中から特に重要なことから取り上げ、アンケートや研究会での参加者の意見を紹介します。ただし、アンケートから作成した集計グラフは今年のデータを掲載します。

（1） 困窮家庭の子どもとの継続的な関わりの場という意義

学習等支援事業の最も重要な意義は、地域で支援を行う大人たちが、生活困窮家庭の子どもたちと定期的・継続的に関わる場ができたことです。困窮家庭の子どもたちのリスクに対応することにより、生活困窮の世代間連鎖を断

ち切る可能性が広がりました。研究会では次のような意見が出されました。

「福祉的な措置を受ける可能性が高い子ども、出会いたいと思っていた子どもたちに重点的に出会うことができる。」「福祉と教育の両方の機能。今までそのようなものがなかった。今まで網にかからなかった子どもにアプローチ、支援できる。各法人の強みをいかした実践が行われていろいろなことができる。」

気になる子どもへの福祉的支援と教育的支援が繋がったという意義もあります。

「福祉的措置と教育機能のつながり。」「福祉関係機関・団体と教育関係機関・団体とのつながりができる。」

(2) 学習支援のためには居場所となることが重要

各団体は具体的にどのような取り組みをしているのでしょうか。図1をご覧ください。

「学校の授業の復習」や「進学のための勉強、相談支援」はこの事業では当然しなければならないものですが、それらに次いで「子どもにとって居場所となるような支援」を17団体が上げている点が注目されます。

学習・生活支援の必要な子どもたちの多くは、自己肯定感、自己有用感を持てず、学力や学習意欲が低い子どもたちです。また、学習等支援の対象の子どもたちは、ほめられるよりもしかられたことの方が多いので、大人に不信感を抱いています。そこで、まず、子どもの警戒心を解くことが必要です。子どもたちが学習等支援の場に喜んで来るためには、子どもたちにとって居場所となることが大切です。アンケートや研究会での発言から抜粋します。

「まず子どもに来てもらうことが何より大事なので、学習ありきではないやり方でやっている。」「ほっとできる環境であることが大切なので、雰囲気づくりには気を付けている。」「子どもたちの事情は複雑なので、安心できる場だということを感じてもらわなければ、勉強をしてくれない。」「一人ひとりと向き合ってそのままの子どもを認めること、言語化した気持ち、非言語の気持ちを受け止めること」

(3) 話を聞いて意欲をひき出す

子どもの居場所となるためには、勉強よりもまず話を聴くことが大切です。多くの子どもたちは、日々の生活で苦勞をしています。学力が高い子どももいますが、例外です。子どもたちは勉強ができるようになりたいと思っていて、いままでそれぞれの子どもなりに努力してきましたが、結果が出ず、勉強に対してあきらめの気持ちを持っています。タダで勉強を教えてもらえるからといって、喜んで勉強しに来る子は少数派です。

例えば、泳ぐのが嫌いな人にスイミングスクールの無料券を配っても、スクールに来ません。クラシック音楽が嫌いな人に、オーケストラの入場券を配っても会場に来ることはありません。希望者がお金を払って来る塾とは根本的に異なっているのです。

「学習支援では、生徒との信頼関係を築くことと、生徒自身が学習や進学へのモチベーションが必須です。そのために、普段から会話をして生徒の日常をキャッチするように心がけています。また、学習をサポートする中で、生徒の学力や躰き箇所、学習習慣の有無を把握するように心がけています。」「子どもはまず、自分が受け入れられるか、話ができる大人かを確認する。」「2時間ひたすら世間話で終わることは多い。」「エラぶってはダメ。教え込もうと思っはダメ。」「ずっと横にいて何をやりたいかを探る。」

週1～2日、1回2時間程度の学習で、学校の授業についていけるレベルにすることは非常に困難です。子ど

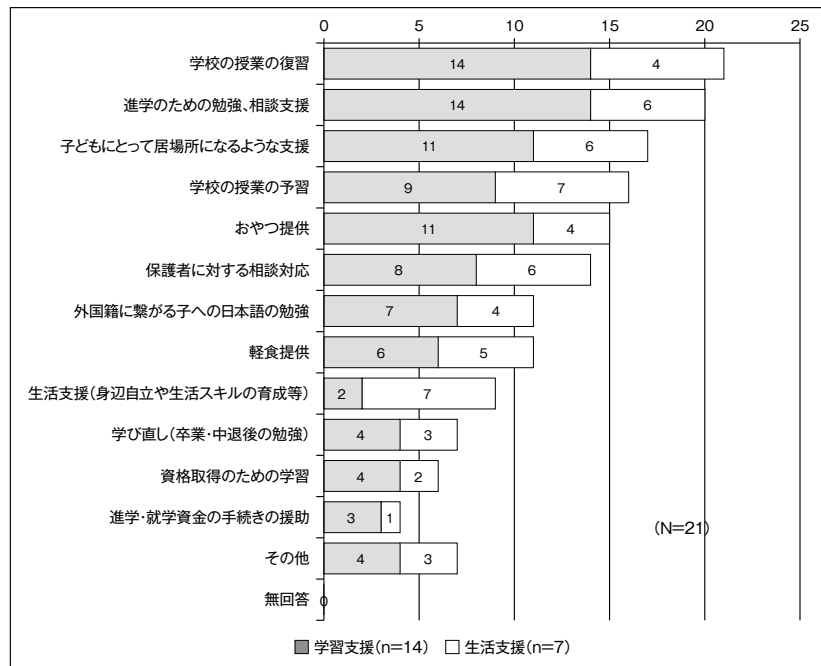


図1 団体で取り組んでいること

もが真に学力をつけていくためには、学ぶ意欲を喚起することが大切です。子どもと会話を重ね、そして、子どもが意欲的になるのを待ちます。スタッフの生の声を聞いてみましょう。

「事業の性質上、『高校入学を目指す』ことが大前提あるので学習活動は行う。しかし、あくまでも学習を通して生きる力をつけるということを大事にしている。」「高校受験対策に特化せず、子ども自身で考える工夫」「学習意欲・進学意欲が高まるようなサポートを目指している。」「勉強をわかりやすく教えることは、二の次。その子の中から出てくるものをまつ方が早い。」

なお、「外国に繋がる子への日本語の勉強」に取り組む事業所が7か所あることも注目されます。

(4) 支援者に求められるものとは？

図2をご覧ください。この事業を実施するうえでの課題を尋ねた質問への答えです。「支援者の確保」と「支援者の質の向上」が1、2番目に並んでいます。

では、どのような支援者が望ましいのでしょうか。学習等支援事業ですが、学習指導の力を求める意見はほとんどありません。求められるのはむしろ、子ども一人一人に応じて、子どもに合わせて寄り添っていく力です。

「勉強は二の次でよい」「スタッフは、教える力ではなく、一人ひとりによりそう力。」「その子に必要なものが何かを知る力。」「何に困っているのかを知る。」「子どもに合わせることができるかが重要。」

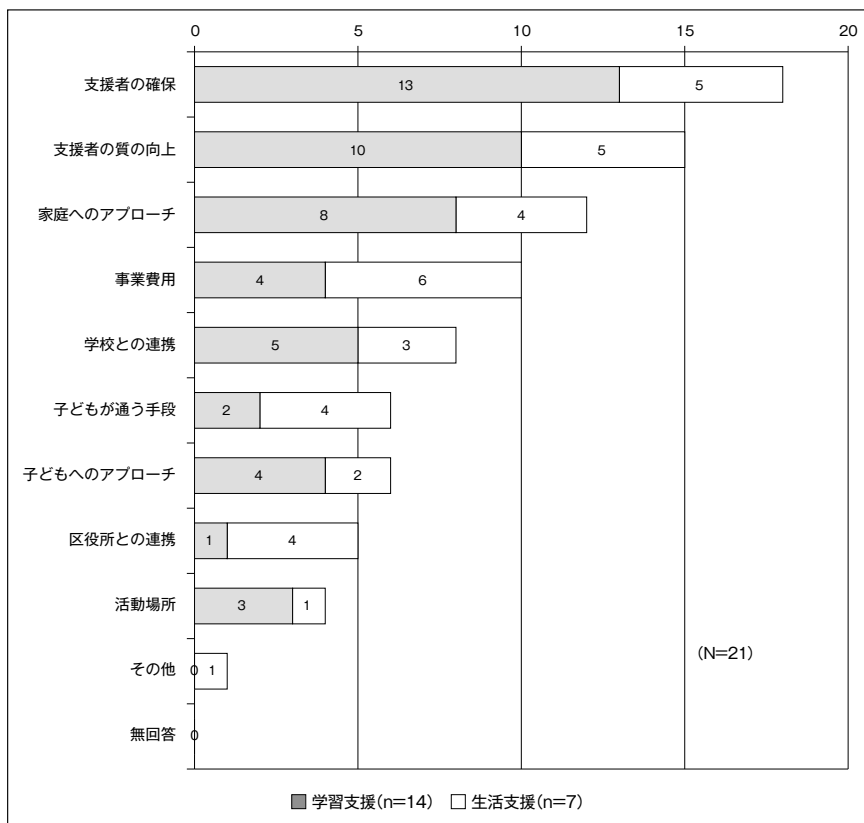


図2 事業を実施するうえでの課題

ひとつの理想の支援者像を求

めるのではなく、いろいろな子どもがいるのだから、支援者も多様でかまわない、マッチングの問題だという意見が多数でした。

「組み合わせが重要」「個別指導が主になるが、担当者の組み合わせの工夫によってよい効果がでる。」

(5) 卒業後の継続的支援の必要性

学習等支援事業は、小中学生を対象としています。アンケートでは、中学を卒業した後の子どもたちとの関わりをたずねました。高校進学を果たしても、すぐに退学しては進学の意味がありません(平成26年度、全国の定時制高校1年生で退学した生徒22%にのびります)。図3のように、多くの事業所で高校生への支援を行っています。「支援していない」という回答の中には、学習・生活支援を始めてから、まだ中学卒業者を送り出していないケースも含まれています。ほとんどの事業者が、中学卒業・高校進学後も子どもたちとも関わりを続ける必要があると答えています。高校生になったからといって、居場所が急にいらなくなるわけではありません。卒業した高校生とのつながりを、法人自主事業枠や、法人の行う別の事業で確保するケースが多く見られます。

「高校進学後もずっと通うことを本人が望み、法人の自主事業枠の利用者として学習支援と居場所支援と相談支援を続けて受けている。」「本団体の運営している地域の拠点として、土曜日含む放課後の様々なプログラムを実施している。例えば、自主学習スペースや地域行事でのボランティア活動で、積極的に参加する子がいる。」

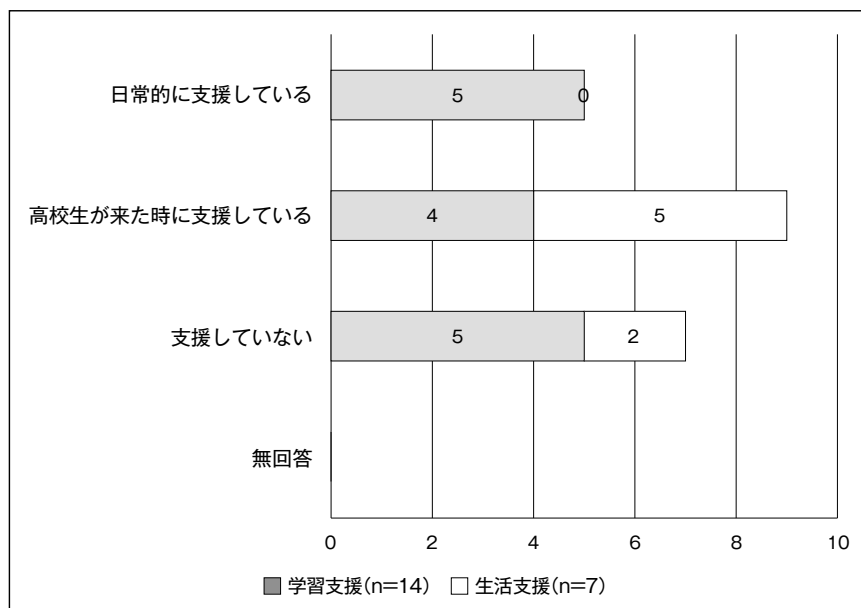


図3 事業を実施するうえでの課題

まとめ

学習等支援事業の対象は、経済的困窮の家庭の子どもたちです。一般に貧困家庭の子どもたちには、以下のよう社会的排除につながりやすい事情を抱えているケースが少なくないといわれます。

- 勉強が好きでない。勉強ができない。
- 自信がない。自己肯定感が低い。
- 大人に対する不信感が強い。
- ひとり親家庭、とりわけ母子家庭が多い。
- 病気などの親に代わって過重な家事を負担している。
- 不登校傾向にある。
- 発達障害や情緒障害を抱えている。
- 十分な栄養が取れていない。
- 保護者(親)が就労で忙しい、健康を害している。
- 保護者(親)が子どもの教育への関心が薄い。
- 外国につながる子どもたち

このような子どもたちへ支援をして社会的排除を防ぐことによって、将来世の中で活躍する人材を育てることが可能です。学習等支援事業が、リスクを抱える子どもたちと毎週継続的に交流できる機会を提供したことの意義は、極めて大きいものがあります。

困難を抱える子どもたちの学力向上や高校進学を果たすには、塾と同じやり方では不可能です。塾はある程度の学習意欲を持つ子どもたちで、保護者(親)が塾代を払ってくる場所です。学習等支援の場合は、子どもの学習意欲が低く、親も教育に関心が薄いケースがめずらしくありません。学習支援を行う前提として、学習等支援の場を子どもたちにとっての居場所とすることが必要です。

そこで、学習等支援事業で支援を行うスタッフや大学生ボランティアに求められるのは、学習指導の力量ではなく、子ども一人ひとりの話を聞き、子どもによりそう力です。

また、学習・生活支援事業に参加した子どもたちにとって、中学卒業・高校入学後も支援事業のスタッフ等の関係は貴重です。中学卒業・高校入学後も関係を継続できるような体制が必要です。

寄り添い型学習支援事業、寄り添い型生活支援事業は、非常に有意義で効果の高い事業です。横浜市内でもますます多くの場所で行われ、全国の自治体にさらに広がることが求められます。

平成28年青少年の「居場所」に関するアンケート調査レポート！

青少年に聞いてみました！

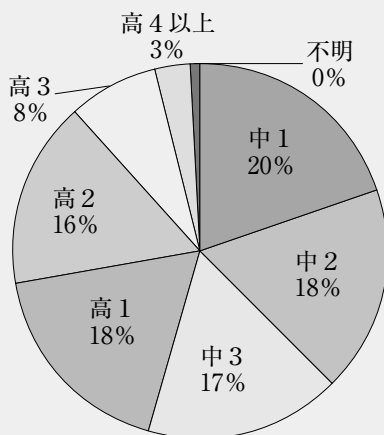
「居場所」ってある？ない？

あなたにとってどんな場所？

このアンケート調査では、青少年育成のキーワードのひとつである「居場所」について、青少年自身がどのように感じているのか、「居場所」と感じられる場所の心理的機能について、横浜市立中学校・高校に所属する2629人にアンケートを行いました。

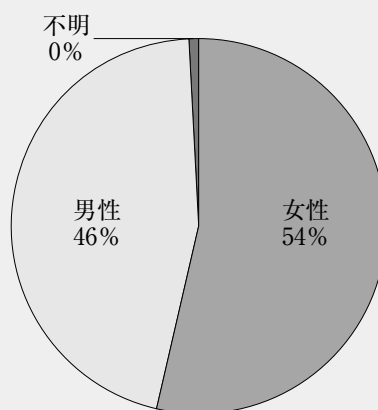
青少年が「居たい」と感じるような「居場所」が、地域や社会全体で充実していくことを願って、本調査の結果をご報告します。

アンケート回答者(有効回答数2629人)



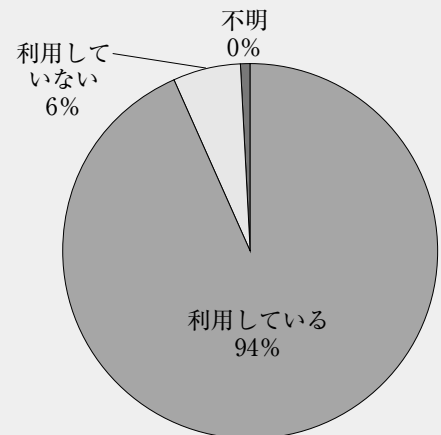
学年

中学生：1453人
高校生：1164人
不明：12人



性別

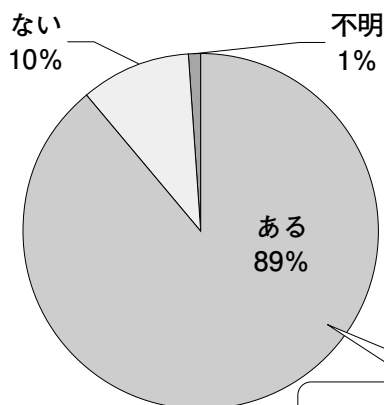
女性：1405人
男性：1215人
不明：9人



携帯電話・スマホ利用者の有・無

利用している：2465人
利用していない：154人
不明：10人

1 中高生のおよそ90%は「居場所がある」と感じている

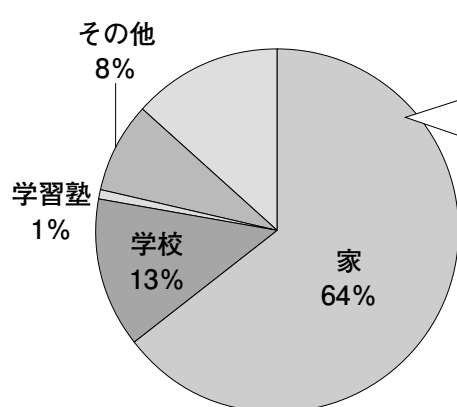


*本調査では、『居場所』を「いつも生活している中で特にいたいと感じる場所」と定義しています。

*「いつも生活している」環境の中で、「居たい」と感じられる場所(=居場所)をもっている中高生が大半を占めていますが、「居場所がない」と感じている中高生も1割程度いることが分かります。

あなたには「居場所」だと感じる場所がありますか？

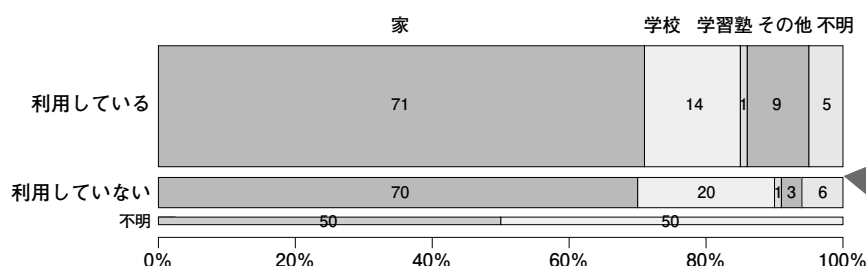
2 「居場所がある」と答えた中高生のおよそ60%が「家」、20%が「学校」を「居場所」と感じている



あなたが「居場所」と感じる場所を具体的に教えてください。

*「居場所」と感じる具体的な場所としては、中学生・高校生ともに「家」と回答した人の割合が最も高く、「学校」が2割、学習塾など「その他」が1割でした。

*この結果から、中高生にとって、「家」はもっとも基本的な「居場所」として重要な役割を担っていると言えます。



携帯電話・スマートフォンを利用していない人は、利用している人に比べて「学校」を居場所と感じている割合が高いという結果がでています。

*「その他」の具体的な内容では、「友人」と回答した人が最も多く、他に「ダンスなど習い事」、「ゲームセンターなど商業施設」、「Twitter、SNS、オンラインゲーム」などの回答が複数ありました。

*「家と学校と友人」等の回答もあり、ひとつの場所ではなく、生活環境全体が「居場所」と感じられていることも分かります。

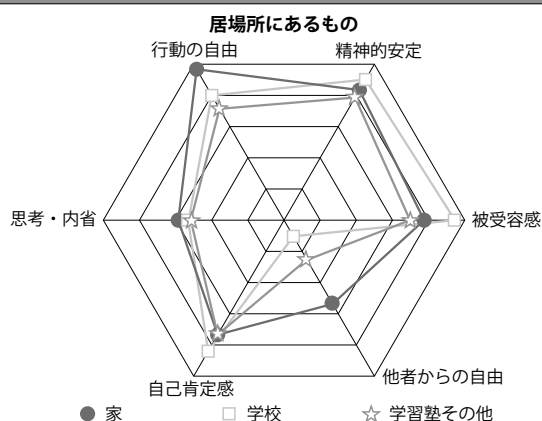
その他の内訳

	中学生	高校生
1	友人	友人
2	スポーツ活動	アルバイト
3	自分のベッド・部屋	自分のベッド・部屋

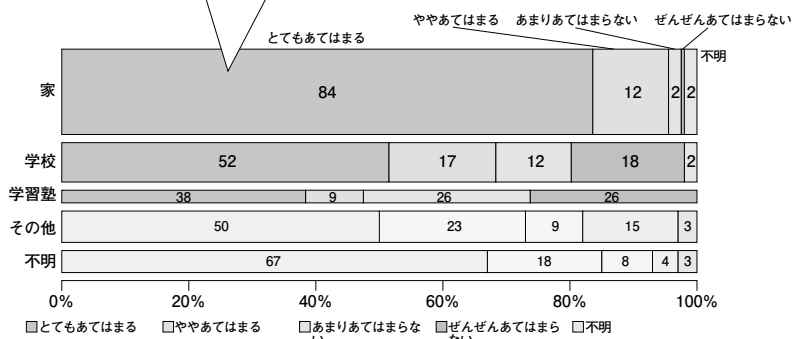
中学生では野球サッカーなどスポーツ活動、高校生ではアルバイトが増えています。

3 すべての場所に共通しているのは「行動の自由」を感じられること

本調査では、『居場所』の心理的機能尺度（杉本・庄司,2006）の質問項目を通して、①被受容感、②精神的安定、③行動の自由、④思想・内省、⑤自己肯定感、⑥他者からの自由の6つの尺度で「居場所にあるもの／求めるもの」の心理的機能を計ります。



Q「寝ることができる」(行動の自由)【居場所別】



＊「行動の自由」とは、「ねることができる」、「自分の好きなことができる」、「自分のものがある」など、自分の行動を自分で決めることができる自由を表しています。

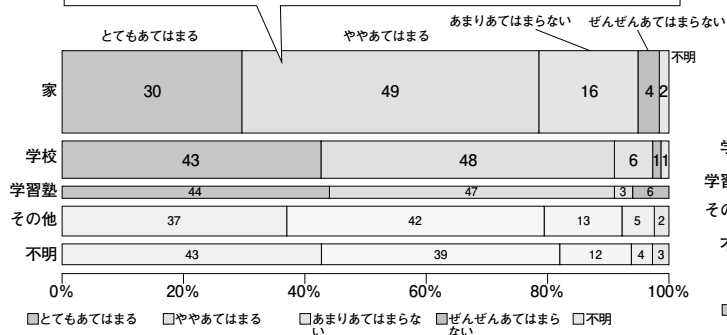
＊今回の結果から、「行動の自由」を感じられる場所は、中高生にとって「居場所」となる可能性が高いと考えることができます。特に「家」を居場所として選んだ人は、「寝ることができる」を評価する度合いが高く、寝ることができるほど安心感を持てる場所が「家」であり、こうした居場所を中高生が求めていると考えられます。

4 学校は、「自己肯定感」や「精神的安定」、「被受容感」を感じられる「居場所」

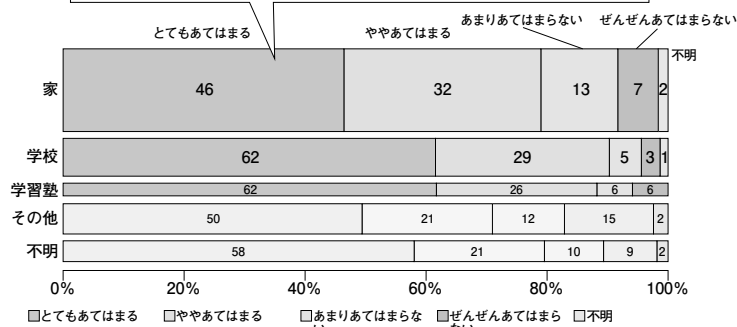
＊「居場所」によって、求められる機能は異なります。学校は、他の場所に比べて「自己肯定感」や「精神的安定」、「被受容感」を感じられる場所になっていることが、アンケート結果から見てきました。

＊学校は、「おもしろくて、自分の能力を発揮することができ、悩みを聞いてくれる人がいる場所」として、中高生の「居場所」になっているということができます。

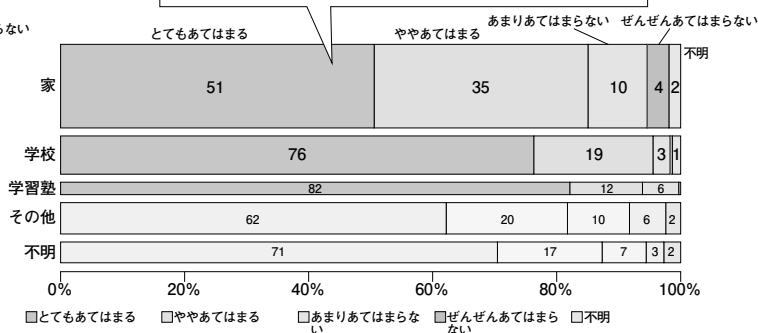
Q「自分の能力を発揮できる」(自己肯定感)【居場所別】



Q「悩みを聞いてくれる人がいる」(被受容感)【居場所別】



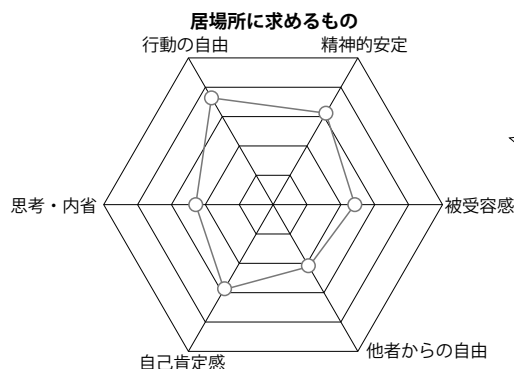
Q「おもしろい」(精神的安定)【居場所別】



5 青少年の10人に1人は「居場所がない」と感じている

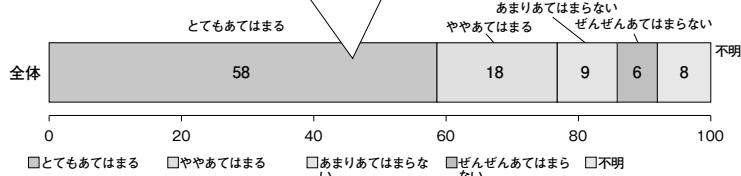
* 今回のアンケート調査では、およそ10%の青少年が「居場所がない」と感じていることが分かりました。

* 「居場所がある」と回答している人の6割が「家」を居場所として選んでいる中で、「居場所がない」と回答している人にとっては「家」が十分な居場所と感じられていない現状があります。



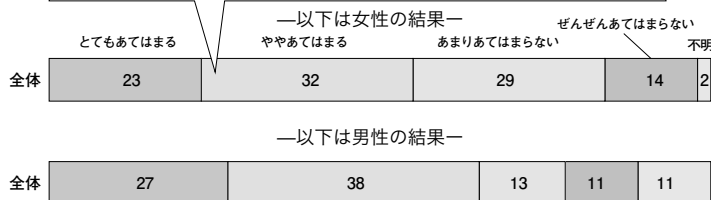
【チャート】「居場所がない」と感じている人が「居場所」に求めるもの

Q「寝ることができる」(行動の自由)【「居場所がない」と回答した人】



* 「居場所がある」と回答した人と同様に、「居場所がない」と感じている青少年が居場所に求めている度合いが高いのは、「行動の自由」でした。特に、「寝ることができる」、「好きなものがある」ような安心感のある居場所を求めていることが、結果から見てきました。

Q「一人ではない」(被受容感)【「居場所がない」×性別】



* 性別では、「居場所がない」と感じている男性は女性に比べて、「一人ではない」「人と一緒にいられる」ような被受容感を感じられる「居場所」を求める傾向があります。

6 求められる青少年の「居場所」

* 青少年にとっての「居場所」とは、「家」や「学校」など身近な場所で見出されることが多く、場所によって求められる機能は少しずつ異なります。いくつかの場所が補い合う中で、「居場所がある」と感じられる状態が生まれていると考えられます。

* 「居場所がある」と感じている青少年は、精神的安定や被受容感、自己肯定感を居場所に求めることができます。その一方で、「居場所がない」と感じている青少年にとっては、こうした基本的な欲求を満たすような「居場所」が必要とされています。

おわりに

今回のアンケート調査では、青少年が「居場所」と感じるのはどのような場所なのか?物理的な場所の特性より心理的な機能に着目した調査を行いました。「居場所」という言葉が直接的に結びついているのが安心感のもてる「家」であること、「学校」は他者と一緒に過ごすなかで自己肯定感や被受容感が育まれる場所であること、そして「居場所がない」と感じている青少年がいることが分かりました。

調査結果は、今後青少年の「居場所づくり」をはじめとした青少年育成活動に活かしていきたいと考えています。

本調査は、一般社団法人横浜すばいすの協力のもと、公益財団法人よこはまユースが実施しました。

●本調査に関するお問合せ●公益財団法人よこはまユース 事業課 TEL:045-662-4170 MAIL:kikaku@yokohama-youth.jp

ヨコハマの子ども・若者の成長を応援する人たちのための情報誌

YOKOHAMA EYE'S 2016

平成29年3月 発行

■編集・発行

公益財団法人よこはまユース

〒231-8454 横浜市中区住吉町4-42-1 関内ホール地下1階

TEL:045-662-3716 FAX:045-664-6254

Mail:soumu@yokohama-youth.jp

URL:<http://www.yokohama-youth.jp/>
